

もっと知りたい ふるさと

20

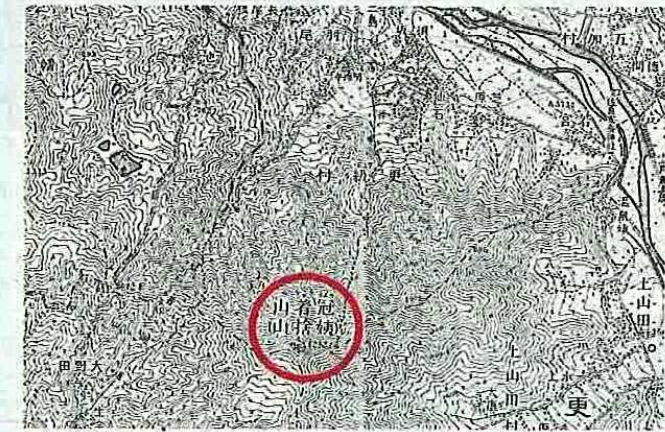
地図に載った冠着山(姨捨山)と 塚田雅丈翁

まさたけ

平安時代延喜五年(九〇五)「古今和歌集」に、「我が心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」の歌に、初めて姨捨山と月が登場する。天曆十年(九五六)「大和物語」は「姨捨山」の由緒を説いている。嘉承元年(一一〇六)「今昔物語」の終文に「...それよりなむ姨捨山とぞ言いける...その前に冠山とぞ言ひける。冠の巾子に似たりける、とぞ語り伝へるとや」と結ぶ。冠山の別説に、手力男命が天の岩戸を運ぶ途中、この山で一休みして冠を付け直した戸隠伝説から呼ばれたと言う。江戸時代には冠木岳(冠力岳)と呼び、佐久間象山は天姥山と歌った。寛文六年(一六六六)仙石区有の「寛文水帳」に「冠着山」の称が初めて登場する。

姨捨山・冠山(冠着山)・更級山は古代から中世末期にかけて、物語や和歌(勅撰集)の中で一体として語られ、また、枕詞となつている。

元禄元年(一六八八)松尾芭蕉が到来した以



明治43年測図、大正3年発行した日本帝国陸地測量部の地図、実際は明治27年測図の地図に冠着山(姨捨山)と記載されたといわれている。

後、その弟子たちや寺僧の宣伝活動で姨捨山の称が冠着山から長楽寺辺りに移つていった。羽尾の月の井酒造、塚田雅丈(戸長・村長・県会議員を歴任)は、その誤りの是正を広く世に訴え、明治二十二年三月九日「長野新聞」三〇三八〜三〇三九号に「実ノ姨捨山」と題して「実ノ姨捨山は冠着山」であり、長楽寺周辺は後世の付会であると論説、また、同紙四三九八号に「姨捨山所在ノ誤ヲ矯正ス」と広告を出した。これに呼応した明治政府の大物政治家・中央の名士・文化人が次々と羽尾に來訪した。佐藤寛は「姨捨山参考」を発表し、渡辺邦武、平時萬、大和田建樹、海上胤平、大給親存、奥原晴湖、公爵近衛篤磨、山田新川など明治のそうそうたる国学者・文人・墨客・政治家などの訪問があり、おおいに姨捨冠着山を鼓吹した。

大島浮名は塚田雅丈の姨捨冠着山復権運動に賛同し、おおいに支えになった人物である。彼は加賀藩百万石支藩である大聖寺出身の藩士で、塚田雅丈とともに発起人となり、明治二十四年八月から二十六年七月にかけて、冠着山の頂上に月読命の社殿と郷嶺山に里宮である観月殿を建設している。これは、羽尾二百戸の助力を得て、郷嶺山の山林伐採整備を行い、更に冠着山道改修工事で黒滝から頂上まで完成した。この事業の経費を工面するために、浮名は「趣意書」を全国の賛同者に出し、協力を募集した。

明治二十七年から日本国の地図作りが始まる。塚田雅丈はいち早くこの情報を聞き「冠着山は姨捨山」であることを働きかける。実

際は復権運動の後半明治二十六年以降より働きかけ、大日本帝国陸地測量部発行の地図に、冠着山は別名「姨捨山」と記載することができた。これにより、姨捨冠着山の復権は成功した。そして、後の世まで語り継がれるように「姨捨山冠着宮遣拜所の碑」を明治二十七年、稲荷山荒町・坂城町刈原榎木坂・麻績村上町ガツタリの三か所に建てた。また、ともに大業を成し遂げた大島浮名夫妻の歌碑を大正五年高齢で没した後、塚田雅丈が郷嶺山に建立する。そして、雅丈本人の顕彰の碑「姨捨山之碑」を大正七年地元有志により建立する。その後、塚田雅丈は大正十一年七十五歳をもって世を去った。

戸倉史談会 大橋静雄



姨捨冠着山の頂上に祀る月読命(冠着神社)の里宮と月見殿を郷嶺山頂に建設
⑤は塚田雅丈が建てた大島浮名の歌碑 ⑦は塚田雅丈の顕彰碑